家庭愛増進術

――型でなしに

岡本かの子

わたくしは自分達を夫とか妻とか考えません。同棲する親愛なそして相憐れむべき人間同志と思って居ます。そして元来が飽き安い人間の本能を征服出来て同棲を続ける者同志の因縁の深さを痛感します。わたくしは因縁こそ実に尊くそれを飽迄も大切にすべきものだと信じて居ります。其処に優しい深切な愛情が当然起るのであります。

わたくしもわたくしの同棲者も元来が或る信念の上に立つと従順な人間になり生活意識や情操が一所に集注するたちと見えます。（それゆえ却ってこの信念を樹立し合わなかった昔はお互いに或る部分が少

し散漫な所もありました）

さて、わたくし達は「夫婦」だなどと云われるとびっくりするようなへんな気がいたします。「夫婦」でないと云うのもそらぞらしいでしょう、でもそれ以上とかそれ以下とかそれ以外とかも云えないのでしょうね。強いて形容詞のなかへ入れられないような人間同志が無上の信頼と哀楽と相憐とを共にして生きて居る。——

既に同一感情と生活意識の上に立って生きて居るとしますれば一つのものを喰べ、同じ所を視、なるべく同じ所に居たいのはあたりまえです。

「あの人達は甘い。」
「あそこではいつも一所（いっしょ）に出かける。」
「へんに仲が好（よ）い。」
などと皮肉らしく云われても平気です。
「かんしんな同棲者達だ。」
「模範（もはん）的な同棲者達だ。」
こうほめられてもあたりまえのような気がします。
世間を対照（たいしょう）してではなくわたくし達はわたくし達の信念を行って居（い）るのですから。
「かの子さんはお嬢様（じょうさま）育ちだから一平（いっぺい）さんが世話をしないと他所（よそ）へ出られないからいつでもついて行って

貰って居る。」

斯う云われても嘘とは云いません。しかし家の内では実に私は一平の召使のような働きをする時がいくらもあるのですから。

両方で適度に助け合い世話もやかせ合わなければ両者の親愛はむしろ保てないと私の生活意識の一部分が明確に感じて居ます。

自分の大切な生命力をついやさ無いものに本当の愛念の残るはずはありません。自分の仕事が実にいそがしい主人が、たまにはめんどうと思っても、主人は主人のひまを割いてわたくしの為にして呉れます。

（他所へつれて出てもらうことより今の処別に何も世話はやかせませんが）それが習慣となれば随って自然にその時々のわたくしへの労力と思って呉れるでしょう。

元来家事にむかない私が自分の研究の暇をさいて、とにかくそれに励むようになったのも仕向けられるばかりでは済まないこれによって仕向けて上げようと云う意力から始まった事です。それから又いくら信念の上に立った親愛同志の同棲者に対してでも、やはり些細な観察や評価の眼はにぶらしてはなりません。それは決して其結果によって打算的な仕向けをするとい

う卑(いや)しい考えからでは無くて、自分の身辺(しんぺん)を晦(くら)まして置くという手前勝手を許さない事になり、また本当に自分の親愛なものの心を停滞させ腐敗(ふはい)させ無い為のやはり叡明(えいめい)な愛の作業だと思います。時には怒りも憎(にく)みもします。しかしそれは私情の憎みや怒りとは違います。(私情で怒ったり憎(にく)んだりした時は直(す)ぐに私は自分に恥じます。そして対者(あいて)につつしんであやまります。)

うやうやしき礼(いや)の八千度さかしらのわがひと言は
ゆるし賜(た)ぶべし。

*

子供に対しての事も一寸(ちょっと)お聞きになったようですね。子供とわたくしの間もこれと同じ気もちです。折々(おりおり)の歌でそれを表わして置きます。

かりそめに叱(しか)りうべしや吾子(あこ)といへどこの天地のひとりの男(お)の児(こ)

この歌は下手(へた)ですが子供を叱ったあとの気もちです。

この世なるえにしふかくして母よ子と和(なご)みくらさんみじかきこの世を。

おみなごの足(た)らはぬふしや多からん母の名により て許せよわが子。

子供のキャッチボールのそれ球をわんわんのように

這って椽の下にさがしに行ったりどろだらけな靴下をつくろってやることもあります。しかしわたくしの下駄も子供に揃えさせることもあり郵便をいれにやることもあります。こちらが小言を云う時もありあちらから意見されることもあります。

女中に対しても同じです。余計なお饒舌や譃言を云う時には口では云わずになるたけきつい顔して無言のいましめをしてやります。でも使い過ぎたり思い違いで云い過ぎたりしたと分れば「気の毒しました。」「すまなかった。」は直ぐわたくしの口から出ます。

これらは何も家庭円満をはかろうの暮しよく家庭を

しようのと巧利的な計画でやるのではありません。わたくしはわたくしの生きて行く信念と好みの潔癖から家庭の者にこう仕向けないでは居られないのです。近年は随分ヒステリックな他に居つけなかった女中などが長く居て呉れます。

要するに。時々だらしがなくなる心をひきしめてはわたくしの好みと潔癖と信念が以上のような生活にわたくしを置きます。たまたま円満な家庭との評を得たのはその無意識な結果に過ぎないのです。決して他人にこれを標示するというような潜越な考えはありませんがたってとの御質問に辞しがたくてざっとお返辞し

ましたまでです。

底本：「愛よ、愛」メタローグ
１９９９（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社
１９７６（昭和51）年発行
※「椽（えん）」「潜越（せんえつ）」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００４年3月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。